



敬愛する兄弟姉妹の皆さん。

私たちは皆様を歓迎致します。そして、私たちの教会にとって重要な問題について情報を得るために時間を割いていただき、ありがとうございます。

きょうは、最近話題になっている教役職に関する新使徒教会の考え方の一つである「女性の霊的職務叙任」についてお話ししたいと思います。

なぜ、この問題に関心を持つのでしょうか。

振り返ってみると、フェア主使徒はその任期中、新使徒教会の教義を洗練させ、明確にするために数々のことを提案しました。レーバー主使徒はその取り組みを継続しました。彼の任期中に、私たちは教会と、そして日本ではかつて聖礼典と呼んでいた sacrament の定義を明確化しました。これら共同の取り組みによる成果として、2012年に「教理要綱」を発行しました。

しかし、教役職の定義については、簡単にしか説明されていません。教区使徒会議では、早くも2014年にいくつかの未解決の問題に取り組みました。その中には、「教役職とは何か」「叙任されるとどうなるのか」「新使徒教会における指導統轄はどう機能しているのか」といった諮問事項が含まれていました。そして2019年4月に答申結果が提示されました。そして、同年の聖霊降臨祭(ペンテコステ)に、その規定が施行されたのです。

「何を」「どのように」に対する答申が示された後は、「誰が」の問題を扱うことになりました。これまで、教会は男性のみを教役職に叙任してきました。私たちが調査したところ、このことを教義的に正当化し得る根拠は見当たりません。すると問題は、この制限的な伝統が通用するかどうか、ということになります。しかし、神学上の問題に対する答えは、社会的な議論や国家の憲法によって与えられるものではありません。聖書の本文を正しく評価することだけが、それに答えることができるのです。

このことをもっと詳しく検証する前に、私たちの考察の過程で重要になる、教役職に対する考え方の、ある一面を強調しておきたいと思います。それは「教役職は職務上の権限と職務上の囑託の二つで構成される」ということです。

- 職務上の権限とは、三位一体の神の名において福音を宣べ伝え、 sacrament を執り行う権限を言います。職務上の権限は、私たちの教会の教義に基づくもので、その有効性は普遍的です。
- 職務上の囑託とは、職務上の権限を行使できる任期や場所の枠組みを定義するものです。職務上の囑託は、その時々々の状況を考慮した上で、新使徒教会の体制の一部となります。

神様は何を望んでおられるのでしょうか。

これが、私たちが最初に抱く疑問です。天地創造は、神様が人間をどうご覧になっているかという話です。天地創造については、二つの異なる出来事が書かれていることに注意する必要があります。

天地創造に関する一つ目の記述によれば、神様は「ご自分のかたちに」、そして特に「男と女に」人間を創造されました。従って、最初から、男女とも部分的に神様のかたちなのです。男と女、すなわち「人間」は、神のかたちに等しく創造されたものであり、両者は神様と同一の関係にあります。男も女も、被造物において神様を体現するという同じ使命を持っているのです。

天地創造に関する二つ目の記述によれば、神様は大地からある存在を創造されました。ここでいう「人間」とは、性的に区別することなく、人間全般を指しています。神様は人間の「あばら骨」から人間と対になるものをお創りになります。この段階で、ようやく男と女の話になります。あばら骨から創造されたということは、両者の人間の身体は同じ性質であり、根源も同じということです。同じ「物質」できているのです。

男女の上下関係が聖書に登場するのは、罪に堕ちた後です。一方の性を他方の性に従属させることは、神様による良い創造には含まれません。

以上が聖書に書かれていることです。これが、新使徒教会の教義にどのような意味を持つのでしょうか。

新使徒教会では、男と女は「神のかたち」に創造された、と教えています。同じ性質と品格を持っています。両者とも等しく「支配」に召されています。つまり被造物を維持し、形作ることを求められている、ということです。これは、女と男が等しく責任を負うということでもあります。

このことは、両方の性別が新使徒教会及び会衆にて教役と奉仕を委託され得る根拠となるものです。

イエス・キリストは私たちに何を教えておられるのでしょうか。

福音書には、イエス様が女性を教え、癒し、世話をされたことが記されています。イエス様の周囲には、男性だけでなく、多くの女性もいました。女性たちは、弟子たちの共同体に加わり、特に経済的に支えていました。

女性たちはイエス様が十字架に臨まれるまで、イエス様について行きました。復活なされた主を目撃したのは女性が最初であり、女性がそのことを弟子たちに告げたのです。復活なされたことを広めることで、彼女たちは福音を告げ知らせる教会の出現に不可欠な役割を果たしたのです。

教役職に関する限り、キリストを模範とすることが最も重要です。キリストご自身が教会にお与えになった教役職は一つだけで、それが使徒職です。教会内の教役職組織を規定する義務と責任を負うのは使徒職です。

すると、イエス様が「女性に対する控えめな姿勢」という当時の風習に倣っておられなかったにもかかわらず、使徒団に男性しか召されなかった、つまりお選びにならなかった、ということが分かります。なぜでしょうか。これについてイエス様ご自身は、何の根拠も示してお

られません。何もおっしゃらなかったのです。ですから、イエス様のご判断を私たちが解釈しなければいけません。

このご判断には、かなり現実的で文化史的な理由もあったと考えられます。つまり、当初、福音の宣教は会堂でしかできませんでした。当時、会堂で話すことができるのは、ユダヤ人男性だけでした。

このように、イエス様のご判断は、教役職に関するこんにちの見解によれば、職務上の権限ではなく、職務上の囑託と関連しています。問題は、女性が職務上の権限を行使できるかどうかではなく、女性が職務上の囑託を遂行できるかどうかなのです。

イエス様の判断を以て、男性だけが教役者になれると結論付けると、行き詰まってしまう。「イエス様がユダヤ人だけを召し出されたから、ユダヤ人だけが使徒になれる」という理屈が成り立ってしまいます。あるいは、主と一緒にいた人たちしか使徒になれないこととなります。この基準では、パウロは使徒になれません。そして、この190年間にわたる再興された使徒職は大きく問題視されることでしょう。

以上のことから何が分かるでしょうか。イエス様は、教会での女性教役職の可能性について、何も言われませんでした。イエス様を模範としても、女性の教役職叙任が可能かどうかは、はっきりしません。従って、教会にとって拘束力のある結論を出すことはできません。

しかし、イエス様の言動が、男女を対等の立場に置かれた創造主の御旨に反することを認めているわけではないことを忘れてはいけません。

使徒書簡は私たちに何を教えているのでしょうか。

この問題は、聖書をめぐる旅の次の道しるべとなるものです。これに関する新約聖書の記述は、矛盾しており、現時点ではそこから明確な結論を導き出すことはできません。

まず、宣教や会衆生活、また礼拝での活動に女性が積極的に参加していることを示す記述があります。特にパウロが管轄した会衆では、女性は重要な役割を果たしました。会衆の指導的立場にあり、異邦人への福音宣教に積極的に参加したのです。

例えば、ローマの信徒への手紙には、執事として奉仕していたフェベという女性や、夫と共に家庭集會を主導したプリスカという女性が登場します。また、コリントの信徒への手紙一には、女性も男性と同じように礼拝に参加し、祈り、預言していたことが記されています。そして、この「預言的演説」は、説教と同じように「福音を伝える」ことを目的としていました。

ただ他方で、ローマ書簡やコリント書簡以降に成立した書物には、女性の共同体生活への積極的な参加に明確に反対している記述があります。そうした書物によると、女性は布教活動には携わることができなくなっていました。女性の宣教を禁じる記述は、主に牧会書簡に見られます。その中には、女性が議会で発言することを禁止していることなども含まれています。これは、エバを通して罪がこの世に入り込んだという事実によって正当化されています。しかしこの説明は、アダムや人間に責任があるとするパウロ書簡と矛盾しています。

牧会書簡に記録されている女性教役職に対する数少ない否定的な記述は、教会内の様々な活動に関するものです。従って、教役職に関する私たちの見解によれば、これらは職務上の権限ではなく、職務上の囑託の範疇です。

これらに関連する聖書の本文は、確固たる神学的正当性を欠いています。執筆された時代との結びつきが強く、明らかに当時の現実を指向しているのがほとんどです。

従って、新使徒教会にとって、新約聖書の書簡の中で、女性が礼拝や教会活動に積極的に参加することを禁じている箇所は、どれも女性を教役職から排除する十分な理由とならないことが明らかとなります。

教会は私たちに何を教えているのでしょうか。

カトリック使徒教会には、新使徒教会もそうでしたが、執事として働く女性がいました。新使徒教会の女性執事は叙任を受けなかったものの、カトリック使徒教会と同様に、特別な祝福も受けたと思われます。1950年代まで、女性執事はおもに牧会や慈善活動に従事していました。そして、この慣習は、これ以降、正当な理由がないまま途絶えています。

その後、女性の教役職叙任の問題は、ほとんど扱われることなく、せいぜい脚注として言及する程度でした。これまで「女性と教役職」というテーマについて、使徒職の公式かつ教義にかなった声明はありませんでした。

さて、これまで論じてきたことをまとめてみましょう。

聖書本文を調べると、以下のことが判明します。

- 神様の御前では、女性も男性も同じ尊厳、同じ価値、同じ使命を持っています。私たちは、創造の歴史からこの結論を導き出しました。
- イエス・キリストがお示しになった模範も、使徒の教えも、私たち自身の伝統も、女性に教役職の権限を与えることに反対する正当な理由にはなりません。
- 女性が教役者になることを禁じられたとすれば、それは外的な事情によるものでした。

では、以上のことを背景とした教義上の正当性について論じます。そしてそれは、人間の本质と救いの必要性という二本の柱に基づいています。

「男も女も等しく神のかたちに造られた」という人間の本质については、すでに天地創造物語がすべてを語っています。彼らは同じ尊厳を持ち、神様から同じ使命を授かっているのです。

人間の救いの必要性については、男も女も同じように罪人であり、神の恵みを必要としていることがわかります。イエス・キリストは、男性のためにも女性のためにも同じように死なれました。そして、キリストが勝ち取った救いは、彼ら人間にとっても共通のものでした。

従って、人間は性別に関係なく、救いを受けなければなりませんし、また受けることができます。しかしそうであるなら、性別に関係なく、御言葉と sacrament によって、救いを伝えることもできるのではないのでしょうか。

その答えは、使徒パウロが書いた、ガラテヤの信徒への手紙にあります。「ユダヤ人もギリシア人もありません。奴隷も自由人もありません。」そして今回の要点が次のように書かれています。「男と女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからです。」御言葉も sacrament も、教会も教役職も、すべてキリストが中心です。ですから、キリストにあっては男も女もなく、ただ人間という存在だけがあるのです。

これからは、使徒職が自らの責任で教会の未来のために決断を下すことになるのです。イエス・キリストは、使徒たちに共同体の生活を体系化・組織化する権限を委託されました。そしてペトロの職務には、聖書に基づいて新しい知見を明らかにする主使徒の権限が含まれています。

教区使徒会議では、すべての諮問事項を非常に集中的に、詳細にわたって議論し、その結果をすべての使徒と議論しました。このような背景から、ここに次の事項を発表させていただきます。

使徒職 — 主使徒に結ばれた使徒たち — は、「男女が平等であることと男女が同等の尊厳を有していることに基づき、女性に教役職の権限を与えることが可能である」と決定します。

具体的には、以下の通りです。

- 女性を全職階の教役者に叙任することができる。
- 会衆から国際規模に至るまで、教会の指導統轄面での奉仕を、女性に任命及び指名することができる。
- 関連する職務上の囑託は、社会や会衆で受容可能なところであれば、どこでも賦与できる。

もう何点か、とても重要だと思うことを強調させていただきます。

- 教役職に召される、つまり教役職としてお選びになるのは神様であって人間ではないという点では、男女とも平等に言えることです。
- 従って、教役職ごとの職階に一定の男女比率を定めることは、これを認めません。神様の御旨によって決定されることであり、人間の意志で決めることではありません。
- 叙任は、会衆、小教区または教区の必要性を考慮する一方、他方では候補者の技量や能力を考慮します。これは女性も男性も同じです。そしてこれは、全職階の教役職に当てはまります。

今後はどのような手続きを踏むことになるのでしょうか。

この規則は2023年1月1日に施行されます。だからといって、どこでもすぐに女性が教役職に就かなければならないということではありません。私たちは、今後もこれまでと同じように、教役職叙任については、慎重を期します。

人を教役職としてお選びになるのは、神様です。賜物は、会衆のために会衆で育まれます。この賜物が特定できれば、神様や会衆への奉仕にそれを活用しようという思いが強くなる

なります。その強くなる思いを悟り、必要なら、自らの意志で、霊の奉仕に役立てます。これには時間と多くの祈りが必要です。

この決断は、私たちの歴史の転換点であると認識しています。そして、まだ多くの疑問があることも承知しています。教義的な背景についてまだ理解できていない方もいらっしゃるでしょう。また、すでに今後の手続きについての疑問をお持ちの方もいらっしゃるでしょう。

もちろん服装の問題もすでに考えています。答えは簡単で、叙任された姉妹は、その地域の習慣に合わせた黒と白のきちんとした衣服を身につけます。

私たちは、メディア、研修、座談会などの場で、あらゆる質問にお答えします。すでに取り組んでいます。

- 近々、「礼拝指針」の特別号が発行される予定です。テーマは「女性への職務上の権限及び職務上の囑託授与」です。
- また、これらの説明は、インターネットのポータルサイトや教会情報誌に簡略化して掲載されます。
- また、各拠点教会では、指導統轄を担当する教役者〔主任職など〕を対象とした研修会や、関心を持つすべての人を対象とした研修会が計画されています。

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、地元の指導者たちが詳細と背景をよく理解する時間を与えてください。これまで、この問題を扱ったのは使徒たちだけです。使徒職が決定したからです。しかし、その重要性を考えますと、教会全体に周知していただくことが不可欠だと思いました。

とりえず以上になります。今こうして、さらにはこの数ヶ月間の長きにわたって、この問題に注目していただき、本当にありがとうございました。この重要な問題を明確にするために、十分な時間をとることが重要だったのです。なぜなら、この問題に対する答えは、社会からの圧力に対する対応ではなく、神学及び霊的な面で包括的な考察の結果だからです。

「教理要綱を作り上げ、教会と sacrament について考察し、そして今度は教役職について考える」という過程を、教会は歩んできました。女性教役職の問題は、教役職の問題における一つの側面です。今回の決断に至ったのは、私たちの信仰の観点から、教役職について包括的に考察した結果です。

私の講演を聞いていただき、私たちに信頼を寄せていただいたことに心から感謝いたします。

私たちの主人であられるイエス・キリストにお仕えすることで、皆さんが神様の祝福と多くの喜びを得られることを祈ります。

では、失礼します。さようなら。